お祖師さまを巡る人々 第10回

高祖日蓮大士ご降誕 800年慶讃

鎌倉幕府・第五代執権（幕府の最高責任者）の【北条時頼】は、質素（生活などがぜいたくでない）で堅実（しっかりしている）、また宗教心（神や仏を信じようとする気持ち）のとても強い人物といわれているんだよ。今回は、鎌倉幕府の最大の実力者である【北条時頼】とお祖師さま（日蓮聖人）のお話をするね。

北条時頼

【北条時頼】は、執権を三十歳になる前にやめて、僧（お坊さん）になり、最明寺入道と名乗っていたんだ。僧になってからも【時頼】は、鎌倉幕府に対して強い力を持っていたんだよ。それだけ優秀な人だったんだね。

【時頼】は、僧の姿で諸国（いろんな国）を旅しながら、人々の暮らしのようすを調べていたんだ。まじめに武士たちが幕府の仕事をしているか、農民たちは困っていないかを調べていたんだね。

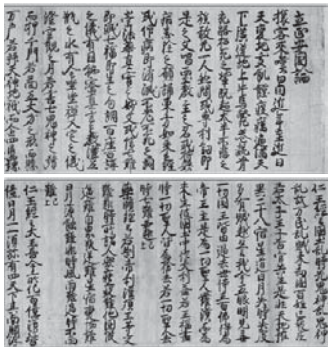
ある冬の寒い夜、【時頼】は、佐野源左衛門常世という貧しい武士の家に泊めてもらうことになったんだよ。常世は、とても礼儀正しく、まじめな武士だったんだ。

親切に旅の僧を泊めたんだけど、家の中を暖める薪がなくなってしまうんだよ。すると常世は、大切にしていた鉢植えの木を折って火の中に入れ、家の中を暖め続けてくれたんだ。僧は常世のやさしさにとても感動するんだね。

そして、常世は『私は昔、身分のある武士でしたが、一族の者にだまされ、大変な貧乏暮らしとなりました。でも、鎌倉幕府に一大事が起きた時は、一番に駆けつけるつもりです』と、どんなに貧しくても、武士としての心は失っていなかったんだね。

【時頼】は、強く心を動かされたんだけど旅の僧となって、人々の暮らしを調べていたから、自分の身分を明かすことが出来なかったんだ。次の朝、常世にお礼を言って、その家を後にしたんだよ。

春になったある日。突然「鎌倉に一大事」が起こったんだ。武士たちはみな鎌倉に駆けつけたんだ。常世も、すぐに駆けつけたんだね。すると、いきなり執権はじめ偉い方々の前に呼び出されたんだよ。常世はビクビクしながら出て行くと、なんと目の前にいたのは、冬の寒い夜に自分の家に泊めた旅の僧だったんだね。



立正安国論（国宝　千葉・法華経寺蔵）
鎌倉幕府の前執権・北条時頼に建白した『立正安国論』の控えのご真筆。お祖師さまが正面から堂々と幕府を諫めたもので、字体も略字を用いず楷書で書き、厳しい調子が全体にあふれている

『鉢の木』のお話は、北条時頼の人柄をよく表わしていると伝えられている

【時頼】は、常世の『すぐに鎌倉に駆けつけます』という言葉がウソではなかったことを大変喜び、皆の前で常世を褒めたんだよ。そして、鉢の木を切って火を燃やしてくれたお礼に、一族にだまされた領地をもとに戻し、さらに新しい領地を与えたんだね。

このお話は【鉢の木】というお話なんだけど、【時頼】の人柄をよく表わしているといわれているんだよ。

この鎌倉幕府の最大の実力者である【北条時頼】に、【お祖師さま】は、有名な【立正安国論】を差し出されたんだね。（平成三十年十一月号の佛立新聞『お祖師さまをお訪ねする物語』を読んでね）

頭が良く、人々に愛されていた【時頼】だからこそ、【お祖師さま】は『日本の国を一緒に救って行きましょう』と【立正安国論】を出されたんだよ。でも、【時頼】も【お祖師さま】も日本の平和を考えていたんだけれど残念なことに【お祖師さま】の意見は聞き入れられなかったんだ。

しかし、【お祖師さま】は、今の内閣総理大臣のような人に『日本の国全体で御題目のご信心をさせていただきましょう』と意見をするのだから、やっぱり凄い方だね。

北条時頼坐像（鎌倉・建長寺蔵）
時頼は祖父の第３代執権・泰時の善政を受けて、よく政を治めたので、名君のほまれが高い。座像は重要文化財となっている

北条時頼の墓
鎌倉市にある臨済宗建長寺派の寺院の明月院は、紫陽花の名所として知られ「紫陽寺」の通称がある。その敷地内に北条時頼の墓がある